

あるキリスト教系の新聞に教会の説教についての投書がありました。それは、「毎週教会に行って説教を聞くなんて意味がない。私は今まで 30 年間教会に通い 3200 もの説教を聞いた。けれどその中の一つだって記憶に残っているものは無い。このことで私は自分の時間を無駄にした。牧師たちだって自分の時間を無駄にしていると思う。」といったものでした。皆さんはどう思われますか？この投書をきっかけに賛否両論の投書が数週間きましたが、その中にこんな投書がありました。「私は 30 年間結婚生活をしてきました。その間、妻は 32000 食もの料理を作ってくれました。その一つとしてメニューを思い出すことはできません。でも次のことは確かです。この食事で私は栄養を取ることができたし、働くために必要な力をもらったのです。もし妻が料理を作ってくれなかったら私はとうに死んでいたはずなのです。私たちが聞く、日曜日の説教も同じではないでしょうか。」この投書が掲載されてからは、説教についての投書は無くなったそうです。

それは説教だけでなく祈りにおいても言えることです。祈りは呼吸のようなものとはよく言われることです。思い返すと今まで信仰者として数えきれないぐらい祈り、また人に祈ってもらいながら今日までできたのではないのでしょうか？今日の説教タイトル「絶えず祈りなさい」とはどれだけまた長く祈っているのかということより祈りにおいて呼吸のように神様から常に新鮮な神の息吹をいただかないと私たちは一日たりともやってゆけないということを意味しています。祈りは呼吸のようなものとはよく言ったものだと思います。霊とは息のことであり、天地創造において神が息を吹き入れて人が造られましたし、聖霊とは聖い神の息という意味です。

今日の箇所です。弟子たちは「主よ。…私たちにも祈りを教えてください。」と主イエスに願い出ました。彼らは祈りについて何も知識が無かったのでしょうか？いいえ、イエスの弟子たちは皆ユダヤの人々でした。ユダヤの人々は幼いときから祈りを教えられ、毎日良く祈っていました。おそらく、現代の私たちの何倍も祈りに時間を費やしていたでしょう。そんな弟子たちでさえ、「主よ。…私たちにも祈りを教えてください。」とイエスにお願い出ているのです。彼らは祈りについて学びたかったのです。学ぶということは学ぶことによって成長できると考えているということです。祈りについては結構やってきているからもう教わることはないとは考えなかったのです。絶えず祈るということは神を知らない人のように自分の願いだけをくりかえすだけではなく、神のみわざを求め、神のみこころに触れていくような祈り、本当の執りなし手となる祈りなど祈りを学びながら成長できる道があるということです。

祈りを学ぶ方法は数多くありますが、今朝はその中から二つのことを取り上げます。二つとは祈りについて旧約の信仰者に学ぶことと主イエスに学ぶことです。

第一に、私たちは、旧約の信仰者から祈りを学ぶことができます。祈りは、人類の歴史とともに古く、歴史は祈りを学ぶ宝庫です。祈りは聖書のはじめ、創世記にすでに見ることができます。神はアダムを「神のかたち」に造りました。この「神のかたち」には人間が神の声を聞き、それに応答する能力が含まれています。人間は神の語りかけを聞き、それに答えることができる者、つまり、祈る者として造られました。つまり祈りとは神との交わりということです。神との交わりのない語りかけはどんなに美しい祈りのことばであってもひとり言です。神は、六日の間にすべてのものを造り、第七日目には創造のわざを休み、ご自分が造られたすべてのものを祝福されましたが、その祝福の大部分は人間に向けられていました。この日、神は人に語りかけ、人は神に応答したのです。アダムが罪を犯した後も、神は人間に呼びかけることを止めませんでした。神の顔を避けて隠れていたアダムに神は「あなたは、どこにいるのか。」

(創世記 3:9) と呼び求め続けられました。神と人との対話は途絶えることなく、神は常に人間に呼びかけ、人のたましいもまた神を求め、神を呼ぶようになったのです。創世記 4:26 には「セツにもまた男の子が生まれました。彼は、その子をエノシュと名づけた。そのとき、人々は主の御名によって祈ることを始め

た。」と書かれています。これが聖書で初めて出てくる祈りということばです。旧約時代の父祖たち、アブラハム、イサク、ヤコブは皆、行くところどこにでも祭壇を築いて神に祈りました。神はモーセとアロンを選び、イスラエルをエジプトから救い出させました。モーセは、神に逆らい、神の怒りをかったイスラエルのために、赦しを求めてとりなし祈りました。とりなすと言ってもモーセは「民を赦していただくことが出来なかったら、私の名を消し去ってください」とまで言って祈りました。祈りをかなえてくださるなら私のいのちを取り去っていただいても結構ですと祈っているのです。必死さと迫力があります。アロンとその子どもたちは祭司となって、神の幕屋で人々のためにとりなし祈る者となりました。長い間、荒野の時代と同じ天幕のままだった神の宮は、ダビデが計画、準備し、その子ソロモンによって立派な神殿となりました。その神殿を奉獻するとき、ソロモンはこう祈りました。「だれでも、あなたの民イスラエルがおのこの自分の心の悩みを知り、この宮に向かって両手を差し伸べて祈るとき、どのような祈り、願いも、あなたご自身が、あなたの御住いの所である天で聞いて、赦し、またかなえてください。」列王記第一 8:38,39 神はこの祈りを受け入れ、神殿を栄光で満たされました。神殿は、イエスもそう言われたように、すべての民の「祈りの家」(イザヤ 56:7) であつたのです。

やがてイスラエルの人々はまことの神から離れ、神殿に背を向けて思い思いのところに礼拝所を作り、好き勝手な偶像礼拝にふけるようになりました。しかし、そのような中でも、真実に神を礼拝し、心を込めて祈る人々がいました。たったひとりで四百五十人もバアルの預言者と戦った主の預言者エリヤはそのひとりでした。バアルの預言者は大声でバアルの名を呼びましたが、彼らの祭壇には何事も起こりませんでした。しかし、エリヤが「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ。あなたがイスラエルにおいて神であり、私があなたのしもべであり、あなたのみことばによって私がこれらのすべての事を行なったということが、きょう、明らかになりますように。私に答えてください。主よ。私に答えてください。この民が、あなたこそ、主よ、神であり、あなたが彼らの心を翻してくださることを知るようになしてください。」(列王記第一 18:36-37) と主に祈ると、エリヤの祭壇に天から火が降り、その供え物を焼き尽くしました。聖書にはこうした祈りについて驚くような話がいくつもあり、私たちに祈りの力を教えてくれます。イスラエルの人々は、その犯した罪のためバビロンに連れていかれました。やがてバビロンが滅びてペルシャとなり、多くの人が祖国に帰ったのですが、ペルシャに残った人々もいました。ペルシャに残った人々は、外国にあつても、神への祈りを忘れず、それを守りました。ダニエルは、ダニエルを陥れるために「王以外に祈る者は罰せられる」という命令が出た時も、神への祈りを欠かしませんでした。

このように忠実に祈り続けた信仰者たちの物語は、私たちに勇気を与えてくれます。聖書は、一貫して祈りを教えています。聖書を読み続け、学び続けるなら、かならず祈りを学ぶことができます。

次に、私たちは、主イエス・キリストご自身から祈りを学ぶことができます。主イエスが祈りについて語られたさまざまな教えからばかりでなく、ことあるごとに祈られたイエスが模範となるのです。今日のルカ 11:1 に「さて、イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子のひとりが、イエスに言った。『主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。』』とあるとおり、弟子たちが「主よ。…私たちにも祈りを教えてください。」と願ったのは、イエスの祈る姿を見てのことでした。イスラエルには祈りに明け暮れしている人たちが大勢いました。見事なことばの祈りも、知恵に満ちた祈りも、また火花の散るような熱心な祈りも多くあつたでしょう。しかし、弟子たちは、イエスの祈る姿を見て、今まで自分たちが聞いたことも、したこともない、単純でありながら、神への信頼に満ちた祈りがあることを知ったのです。どうしたら、自分たちも、イエスのように祈ることができるだろう、イエスのように祈りたい、そんな思いから、「主よ。…私たちにも祈りを教えてください。」と願い出たのです。

シュバイツァー博士は、人々から「子どもを教育する秘訣は何ですか。」と聞かれたとき、「それは三つある。第一は、子どもの模範になることだ。」と答えました。人々が、では「第二と第三は何ですか。」と聞くと、「第二も、第三も、子どもの模範になることだ。」と答えました。シュバイツァー博士は模範によって教えることの大切さを教えたのです。子どもはおとなが言うことではなく、していることを真似ます。口でいくら立派なことを言っているとしても、していることがそれと違っていれば、子どもは決して大人の言うことを信用しません。私たちは、子どもの良い模範になりたいと願っているのですが、なかなかそうなれないことになりがちです。しかし、イエス様はすべての点で完全な模範でした。弟子たちが、使徒となって教会を指導することができたのは、イエス様と共にいて、イエス様ご自身から、イエス様の模範から学んだからでした。イエス様は祈りにおいても、弟子たちの模範でした。イエス様はいつも、朝早く起きて、ひとりで寂しいところで祈っておられました（マルコ 1:35、ルカ 5:16、9:18）。イエス様は、断食の祈りや徹夜の祈りにおいても、弟子たちに模範を残されました（マタイ 4:2、ルカ 6:12）。イエス様はゲツセマネの園でひれ伏し、血の汗を流して祈られました。十字架の上で自分を十字架につけた人々のために祈られました。息をひきとる前の最期のことばは、「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」（ルカ 23:46）でした。イエス様のご生涯はじつに祈りの生涯でした。私たちは、その生涯を祈りによって過ごされたイエスの模範から、祈りを学ぶのです。

しかし、イエスの模範から祈りを学ぶというのは、考えてみると、不思議なことです。イエスは神の御子です。御子である神です。イエス様は祈りを聞かれる方であって、祈りをささげる方ではなかったはずですが。ところが、イエス様は、この地上では、祈りのほか助けを求める方法がないかのように生きられました。イエス様は人となって生まれたときから、命を狙われ、命の危険にさらされていました。イエスはその生涯のほとんどを、名も無く、貧しく過ごされました。神の国を宣べ伝えるようになってからは、ユダヤの各地を歩き回り、枕するところもない生活をされました。イエス様の教えに反対し、イエス様を亡き者にしようと企む人々から、いつも狙われていました。そのような中で、イエス様は涙と叫びをもって父なる神に祈り求めました。ヘブル 5:7 に「キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。」とあるとおりです。イエス様は、その生涯で、人間の罪から来る悲惨さのすべてを味あわれました。「キリストの知らない苦しみはない」と言われるように、私たちが体験する苦しみでキリストが味あわれなかったものは何一つありません。イエス・キリストは、あの十字架の上で、罪の刑罰そのものさえも味あわれたのです。それは、ご自分の死によって私たちのための救いを勝ち取るためでした。私たちの救いはイエスが成し遂げてくださいました。しかし、その救いを受け取るためには、私たちの側の信仰、つまり、救われたいとの願いや救いを求める祈りが必要です。イエスはその祈りを教えるため、ご自分が最も祈りを必要とする人間となり、祈りの生涯を過ごしてくださったのです。イエスは、救いを勝ち取るためばかりでなく、私たちに救いを自分のものにする祈りを教えるためにも、人となられたのです。

イエス様は天から「このように祈れ。」と教えを垂れ、祈っていない人々や的外れな祈りをしている人々を罰してもよかったのです。しかし、そのようにしても、人は誰も真理を悟ることができず、祈りを学ぶことが無いことを、イエス様はご存知でした。それで、自らが最も祈りを必要とする人となり、私たちに目に見える形で、具体的に祈りを教えてくださったのです。これらすべてのことはイエス様の愛から出ています。イエス様はそれほどまでに、私たちを愛し、私たちに祈りを学んでほしいと願っておられるのです。このイエス様の愛に、この願いに、私たちはどう応えるのでしょうか。

「主よ。…私たちにも祈りを教えてください。」という謙虚で、熱心な思いをもって、主の愛に応えたいと思うのです。絶えず主に祈ることを通して祈ることを学び続けたいと願われます。